

## 与那国島の遺跡

知念 勇

(沖縄県立博物館)

Notes on the Archeological Sites of Yonagunijima Island

Isamu CHINEN

(Okinawa Prefectural Museum)

### はじめに

与那国島の考古学調査は、戦前までは皆無である。明治時代に笹森義助によって、ヤマト墓の人骨の調査が行われている。<sup>注1</sup>

この島に遺跡が発見されたのはかなり遅く、1954年4月の高宮廣衛による調査が初めてである。この調査によって、仲橋遺跡、旧島仲部落遺跡、与那原遺跡、裏野遺跡の4遺跡が発見されている。<sup>注2</sup>

その後、1964年には九州大学人類学教室によってヤマト墓の調査が行われた。<sup>注3</sup>その結果墓前面には遺物包含層があることがわかり、大和墓遺跡として扱われている。

1971年8月11日から同31までの20日間、沖縄大学学生文化協会による与那国島調査が行われ、慶田崎遺跡、トウグル遺跡、上里遺跡の3遺跡が新たに発見追加された。<sup>注4</sup>

さらに1979年5月から1980年3月までに実施された沖縄県教育庁文化課による竹富町と与那国町の遺跡詳細分布調査によってサンバル村遺跡、トウグル浜遺跡、ダンノアジ遺跡、サイトウ村遺跡等の4遺跡が新たに発見された。<sup>注5</sup>

1986年に与那国町教育委員会による緊急発掘調査が行われた際に、与那原遺跡東の道路を隔てた台地にナガト原遺跡と西側にンダン遺跡が新たに発見されたことによって与那国町の遺跡は合計14遺跡となった。<sup>注6</sup>

なお教育庁文化課の詳細遺跡分布調査によって、大泊浜貝塚が島の東端の大泊浜に発見された。砂丘断面には軽石を含む厚さ30cmの黒砂層があり夜光貝、獸骨、魚骨等が発見されているため無土器の貝塚である可能性が高いと報告されている。しかし、人工遺物が発見されているわけではないので、現在のところは遺跡として取り扱うわ

けにはいかない。したがって、ここでは遺跡からは除外することにした。

今回の総合調査でも新しい遺跡の発見が出来ればと考えていたが、調査期間が正味2日半と短期間であったため周知の遺跡の確認調査すら満足には出来ない状況であった。したがって今回は既に知られている遺跡の表面調査によって得られた遺物の紹介とこれまでに実施された発掘調査の成果などから与那国島の遺跡について整理し考察を加えてみたい。まず各遺跡の概要について述べることにする。

### 浦野遺跡



浦野遺跡遠望

祖納部落の東方約1kmの地点、標高約30mの石灰岩からなる平地に立地する遺跡である。1954年高宮によって発見された。この一帯は畑地となっており、近年行われた農地改良によって遺跡は大部分が破壊されたと見られている。遺跡の範囲は、500m×300mの範囲にまたがり与那国島の遺跡の中では島仲遺跡につぐ規模のものである。

遺跡は広範囲にまたがるが、遺物の散布

は極めて少ない。以下採集遺物について述べる。

第1図1は白磁の小形碗で、釉は灰白色で胎土は白色である。小形破片のため器形の復元は不可能である。

第1図2は青磁碗で外面には丸籠による蓮弁文がみられる。内外面に釉がかけられるが胎土が灰色をなすため発色はダークグリーンを呈する。

第1図3は青磁碗の底部片である。内外面に淡青色の釉が薄く掛けられているが外底疊付け内は露胎である。内底部には笠削りの草文が見られる。

第1図4は大型陶器の底部片で、現存部でみると内外面とも無釉である。器厚が1.2~1.5cmで厚い。内外とも鼠色を呈する。

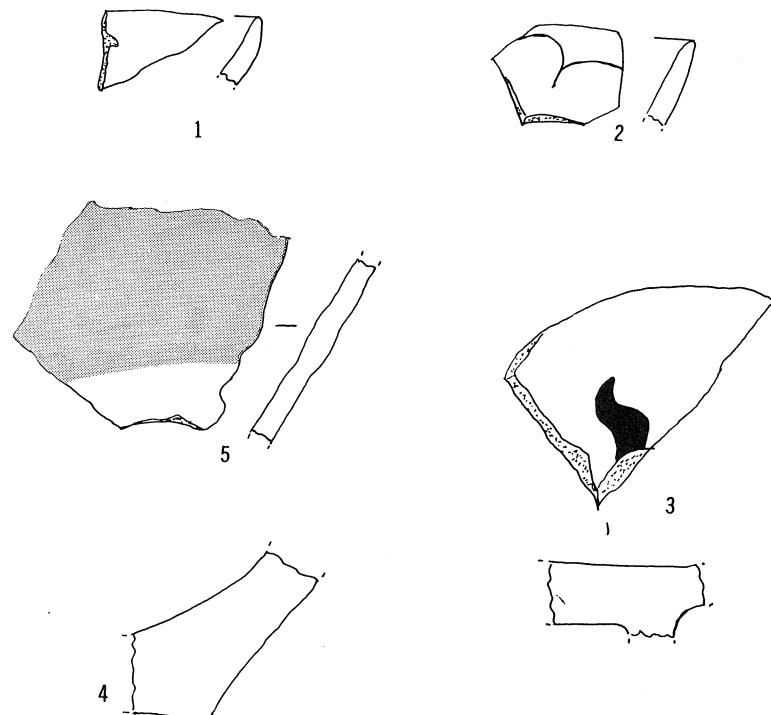
第1図5は約3mmの厚手の褐釉陶器である。外面には褐釉が施されるが下端は露胎であるため底部近くの破片と見られる。内面は赤褐色で露胎である。内外面にロクロによる整形痕が見られる。

これらの遺物からみると本遺跡は、15~16世紀の集落跡であったことが分かる。

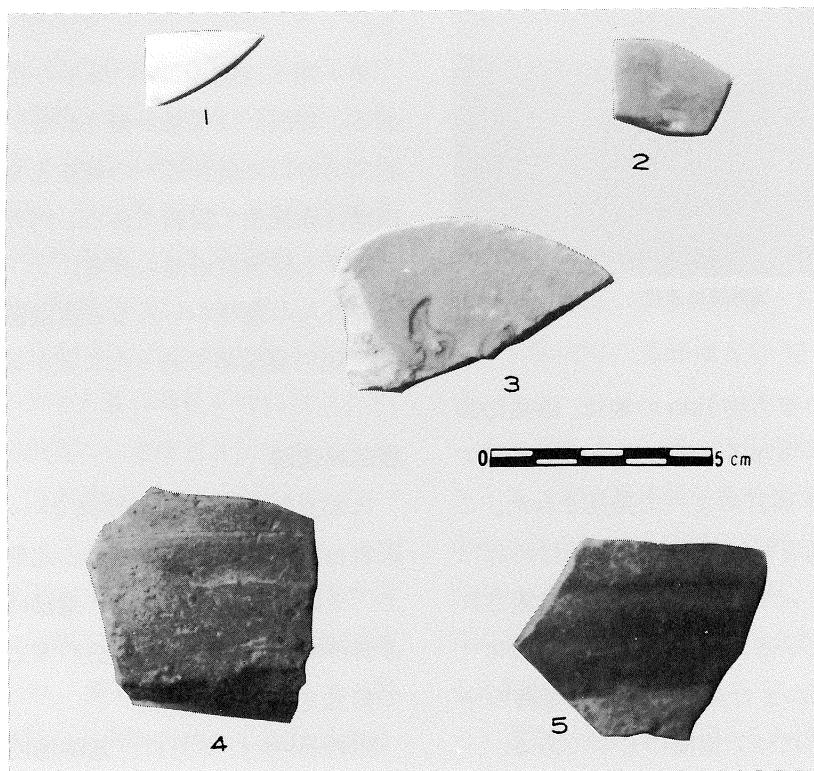
### 慶田崎遺跡

久部良小学校北側の標高25~28mの石灰岩台地に立地する。遺跡の北側に隣接して「久部良バリ」がある。遺跡は、1971年8月沖縄大学学生文化協会の考古班によって発見された。

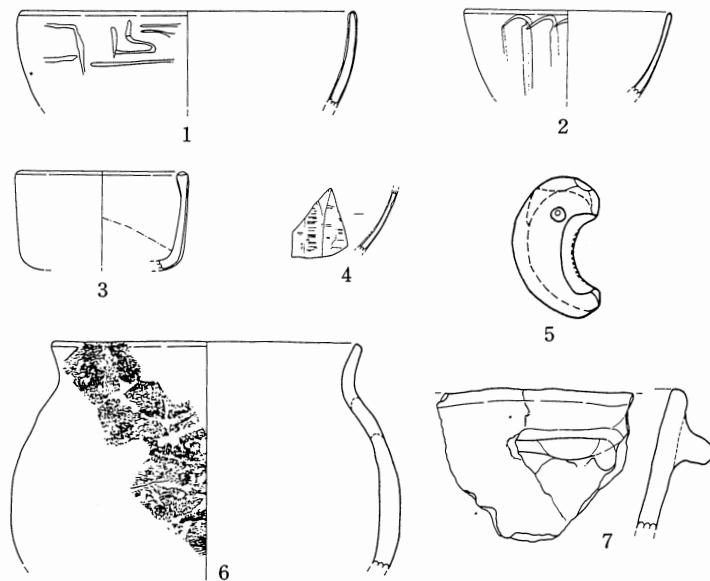
昭和60年4~5月に、遺跡地内に久部良小学校体育館が建設されることになり、緊



第1図 浦野遺跡採集遺物



浦野遺跡採集遺物



第2図 与那原遺跡出土遺物  
青磁1～4 曲玉5 壺形土器6 外耳土器7

急発掘調査が与那国町教育委員会によって、実施された。その報告によると次のようになる。

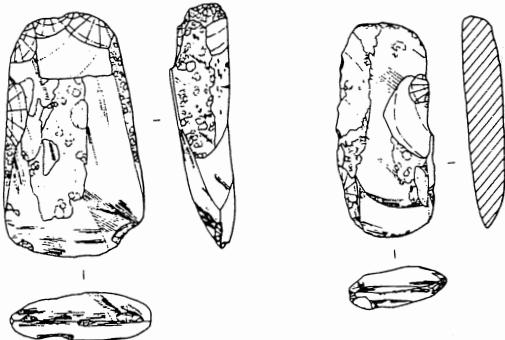
三層からなるが第一層は攪乱層であり、第三層が地山のマージ層であるので、遺物包含層は第二層だけであり、単一文化層である。第二層は厚さ25～30cmと薄い。

出土遺物は、青磁、白磁、染付、須恵器、褐釉陶器などの輸入陶磁器をはじめ地元産の土器、石器、円盤状土器製品などが出土している。

出土遺物からみるとこの遺跡は、14～16世紀初頭の集落遺跡であることがわかつている。

今回遺跡周辺の表面調査を行ったが、遺跡の中心地は学校の体育館が建設されたこともあって、遺跡とかかわる遺物は採集出来なかつた。

#### トゥグル浜遺跡



第3図 トゥグル浜遺跡の石斧

1971年沖縄大学学生文化協会によって発見された。

祖納部落の後方、トゥグル浜と呼ばれる小さな砂浜に面している。この砂丘の後背には、標高2～12mの琉球石灰岩台地が形成され、与那国丘陵はこの台地上にある。

遺跡は発見当初はこの砂丘地に形成されているとみられていたが、発掘調査の結果砂丘上ではなく、その基盤となる標高5~6mの石灰岩上に堆積した赤土の中に包含されることがわかった。この遺跡は海から約10mの地点に位置する。

遺跡の立地が与那国空港の東に隣接することから、空港拡張工事に伴って、1983年6月から同10月まで、沖縄県教育庁文化課によって緊急発掘調査が実施された。

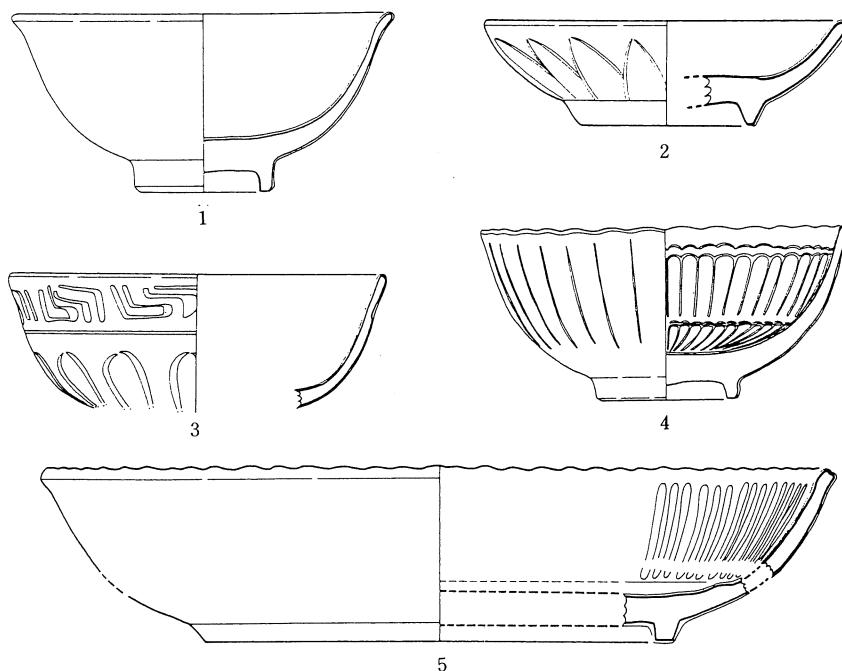
その成果によると、この遺跡は八重山編年第I期の無土器遺跡である。出土遺物も石器（石斧・石製ドリル・敲打器・すり石・石皿・有穴石器）ヤコウガイ蓋製スクリーパー・貝斧・骨製品（ドリル状製品・有穴サメ製品・有穴椎製品）などのほかイノシシや魚貝類が出土している。

現在与那国島で知られる最古の遺跡で、唯一の石器時代の遺跡と考えられているが、この遺跡と同様無土器時代の遺跡である、波照間島大泊遺跡や、石垣島神田貝塚などからは12世紀に比定される中国陶磁器などが出土し、従来考えていたよりは新しいことがわかっている。

しかし、ながら当遺跡からはこれらの中國産の陶磁器は発見されていないので、時期の設定はなされていない。遺跡の系統から言えば沖縄諸島との関わりよりも南方との関わりが強いと考えられている。いずれにしても現時点では与那国島最古の遺跡であることはまちがいない。

#### 与那原遺跡

1954年、高宮廣衛が発見した遺跡である。



第4図 与那原遺跡出土 青磁

祖納の東南約2.5kmに位置する字祖納1881の1と1916番地内に所在する。遺跡の標高は約40mで、遺跡の周辺は、砂糖キビ・桑畑・水田となっており、周辺より一段と高い石灰岩台地となっている。

本遺跡の周辺には与那原按司の妻であるブナダラの墓やその東南約500mの地点にはヤマト墓、東側台地にはナガタ遺跡、西側にはンダン遺跡などがあり遺跡の集中する地域となっている。そして、この遺跡の東側には、与那国島の観光地であるサンニヌ台、南海岸には立神岩などがある。

この地域に多くの御嶽が集中することがわかつており、前述の集落跡とかかわることが考えられる。

与那原遺跡の調査は1984年から1986年にかけて、青山学院大学による1~3次の発掘調査が行われた。

その後、本遺跡は個人農家の畠地改良等に伴う緊急発掘調査が与那国町教育委員会によって、実施された。<sup>注7</sup>

遺構としては、礎石をもつ住居跡、倉庫跡とそれに伴う遺構などの他、鍛冶屋跡などが発見されている。鍛冶屋跡の遺構からは、大型羽口がまとまって発見されている。

出土遺物は、青磁・白磁・褐釉陶器・土器（壺形・鉢形・鍋形・碗形）石器（磨石・凹石・叩き石・砥石）鉄製品（釘・刀子など）玉・曲玉などの人工遺物の他、ウシ、ウマなどの家畜の骨も発見されている。

これらの遺物みると、本遺跡は14~16世紀にまたがる集落跡であることがわかつている。

### ヤマトバカ遺跡



ヤマトバカ遺跡

与那原遺跡の西南約500mの地点、標高約60mの石灰岩丘陵の中腹にある崖葬墓である。冒頭にのべた笠森儀助の「南島探検」では平家の落ち武者の墓として、取り扱われたため一般的に知られるようになった。

北向きに開口する間口3m×4m、奥行10mの半洞穴である。洞穴の前庭部には八重山式土器の包含層が確認されており、近世の遺跡とみられる。

九州大学人類学教室によって、納骨されている人骨を中心に人類学的調査がおこなわれた。<sup>注8</sup>

### 島仲橋遺跡

高宮によって、1954年に発見された。発見当時は「民家並びに道路上、に遺物包含層らしき黒土層があり、表面から外耳土器が得られる由」と述べている。<sup>注9</sup>

しかしながら、前回文化課が行った分布調査と今回の調査でも遺物包含層は確認出来ず、遺物の採集も出来なかった。

なお文化課による分布調査報告書では、祖納遺跡となっているが、発見者の意志を尊重して、ここでは島仲橋遺跡とした。このように特別な理由もなく遺跡名を変更することは、混乱を招くのではござる。

### 島仲村遺跡



島仲村遺跡

祖納部落の南方、サンニヌ台の西側に広がる標高 50m の台地上に立地する。ここは与那国島の中央部に位置する台地で、与那国島で最も広い平地である。

かつて、島仲村の集落跡として伝えられ、当時この島を支配していた女酋サンアイ・イソバにかかる遺跡として知られる。この付近にはイソバの屋敷跡や墓そして、拝所などが分布する。遺跡の東側には、クブラバリと同様の人減らしの伝承で名高い人升田がある。

遺跡はこれら伝説上の場所を含め広範囲に広がっている。その西側は崖地になっているが、崖地付近には現在も屋敷跡が多く残っている。

遺物の分布する地域も広範囲にまたがっているが、遺物は全域に限なく分布するのではなく、分布範囲はブロック状に点在している。そのことから、集落は一箇所に固まってあったのではなくいくつかのブロック状に散在していたことが考えられる。しかしながら遺物の分布量は極めて希薄である。今回の調査では特に、島仲遺跡に重点をおいて調査し殆ど一日を費やして遺物の採集につとめたが遺物の量は究めてすくなかった。沖縄本島や宮古島、石垣島などのこの時期の集落跡と比べると極端に少ない。

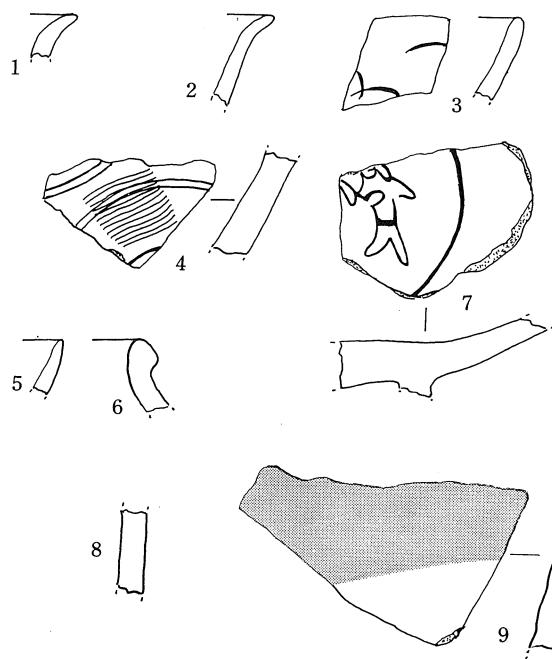
以下今回の採集遺物のなかから主なものを紹介することにしたい。

第 5 図 1 は口縁部が外反する青磁碗である。青灰釉で貫入がみられ、胎土は灰色を呈する。小破片なため、口径は不明。

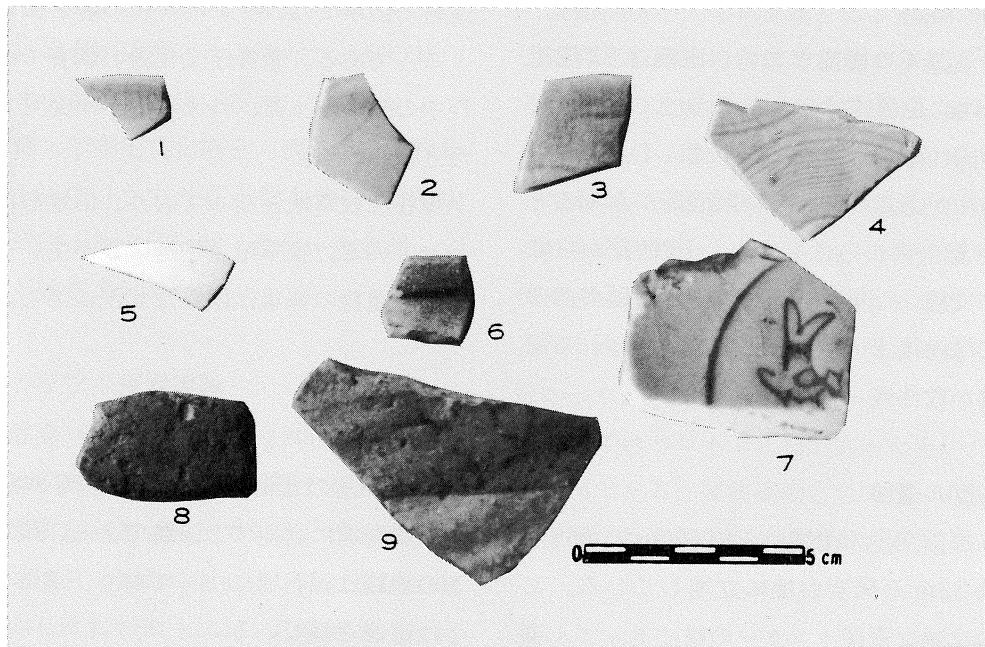
第 5 図 2 は口縁部が外反する青磁碗である。豆青色で光沢を有し貫入はなく、胎土は乳白色である。

第 5 図 3 は直口形の青磁碗である。口縁外面には電文とみられるが小片のため全形はわからない。表裏面と胎土は黄緑色を呈する。

第 5 図 4 は、薄い失透明の釉で、胎土は灰色なため灰白色の白磁である。表面及び胎土は乳白色である。小片であるため器種は不明だが器厚が 1cm もあるため大型碗か鉢の底部近くかと見られる。内外面とも釉がかけられているが外底部近くは露胎となっている。内底部には、二つの重弧文があり、その内側に櫛描文がみられる。



第5図 島仲村遺跡採集遺物



島仲村遺跡採集遺物

第5図5は、白磁の小形の碗状をなした杯である。釉と胎土は白色で光沢があり、貫入は認められない。

第5図6は口縁部が丸くなる、褐釉陶器の小形の壺片である。

第5図7は青磁碗の底部で内外面に豆青色の釉がかかり、光沢を有し貫入は認められない。外底高台内部は露胎となる。内底部には籠描きの魚文がみられる。

第5図8は厚さ6mmの薄手の土器であるが小破片のため器形は不明である。内面は黒色で、外面は赤褐色、胎土には貝などの細片が混入する。

第5図9は褐釉陶器の底部近くの破片である。外面には褐釉がかかるが、内面と外面の下端部は露胎で、胎土は灰色となる。大型器形が予想されるが器厚は5~7mmと薄手である。内外面にはロクロ回転痕が認められる。

第5図4の櫛描き文の白磁碗は13世紀の後半に位置づけられるもので、小破片なため図には示さなかったが他に1点この種の破片がある。これらの陶磁器からみると13世紀の末からはじまり、15世紀から戦前まで続いた集落と見られる。遺跡の西の端には近年まで使われていてと見られる屋敷跡が数件残っている。

#### トゥグル遺跡

与那国空港の南端から約500mの地点の標高33m石灰岩台地に立地している。ここには国立畜産センターの横にトゥグル御嶽がある。遺跡はこの御嶽を中心に東西約



トゥグル遺跡

100m、南北約200mの範囲に分布する。外耳土器、外来陶磁器などが採集されている。

#### サンバル村遺跡

与那国空港の西約1kmの地点、標高約40mの石灰岩台地に形成されている。

この遺跡もチデイグ御嶽を中心に広がる遺跡で伝承では、サンバル村の跡と伝わるところである。教育庁文化課の調査では耕作中の畑から土器、外来陶磁器が発見されたと言われる。

現在は牧草地となっており、旧地形は失われている。牧草地と畑地は草が生い茂るため、遺物の採集は困難な状況にある。

#### 西真嘉遺跡

比川部落の北側に隣接する標高80mの石灰岩台地に立地する遺跡である。現在はこの地域は採石場になっており、遺跡の大半は破壊されている。

現部落の裏側台地にあたり、遺跡からは

現部落を見おろすようになっている。石組遺構なども確認されている。今回は時間的な制約があって、この遺跡の調査は出来なかつた。

### 上里遺跡



上里遺跡

比川部落の北西約400m地点の標高約10mの砂丘上に立地する。遺跡の範囲は東西100m、南北100mの広範囲にまたがっている。現在は畑地となっており、畑の耕作のために攪乱されている。

沖縄大学学生文化協会の調査では、採集土器588片（うち外耳土器1個）、褐釉陶器、青磁4片の他白磁・染付・須恵器・玉などが採集されている。

### 伝ダンノアジ屋敷遺跡

久部良ゴミ処理場の東約200mの地点標高30mの石灰岩台地に位置するダンノアジの屋敷あとといわれている。この遺跡の南崖下は東シナ海に面している。遺跡の中央部の石灰岩台地上には、「遠見台」と見られる高さ約1.5m、幅約3mの石灰岩で



ダンノアジ屋敷遺跡の石垣「遠見台」か

築かれた野面積みの石垣がある。

ダンノアジ按司の屋敷伝わるり、かつては集落跡もあったといわれるが、付近からは集落であったことを示す遺物は未発見である。したがって集落跡ではなく「遠見台」遺跡である可能性もある。

### 伝サガムトゥ村遺跡

比川部落と久部良部落を結ぶ道路に南接する標高約30mの台地に立地する遺跡である。遺跡の北側崖下には満田原といわれる水田が広がっている。遺跡は現在牧場となっており、保存状態は良好ではあるが遺物の採集は困難のようである。この丘陵の南側斜面には遺物包含層が見られるようであるが、今回の調査ではその場所は確認できなかつた。

伝承ではサガムトゥ村があったといわれる場所である。採集遺物としては、八重山式土器と外来陶磁器や鉄滓がある。

## まとめ

以上与那国島の遺跡について概略を述べたが、遺跡の関連について考古学的な考察をしてまとめとしたい。

まず第一に与那国島で最も古い遺跡は、現在のところトゥグル浜遺跡である。しかしこの遺跡の実年代を決定づける資料は発見されておらず、明確ではない。しかしながら、近年の八重山諸島の遺跡発掘調査の成果によると12世紀を大幅には遡らない年代と考えられる。

それに続く遺跡は、今回の総合調査で仲島遺跡から採集された13世紀後半の白磁碗であるがこれも採集量は2片だけであり、この遺跡が13世紀代まで遡れるかは不明であるが、その可能性をこの資料は示しており、そのことは今回の成果考える。そうなるとサンアイ・イソバ以前からこの集落が存在したことになる。採集遺物からみると14世紀代には本集落は確実にが存在したことがわかる。

本遺跡と並行する14世紀から存在した集落としては、久部良部落の慶田崎遺跡と与那原遺跡がある。さらに15世紀代になって、浦野遺跡トゥグル遺跡、西真嘉遺跡、伝サガトゥ村遺跡などがある。

この島に関する最も古い記録である「李朝実録」によると（1479年）漂流民の記録では、与那国島の人口はわずかに102人である。<sup>注7</sup>

当時存在していた集落としては島仲村遺跡、慶田崎遺跡、与那原遺跡、浦野遺跡な

どの4遺跡が考えられる。その中で、もっとも勢力があったのは伝承や遺跡の規模などからみて、島仲村遺跡ではないかと考える。浦野遺跡と合わせると祖納周辺には、半数以上の人人が住んでいたと考えられる。

したがって、残りの40名ほどが与那原遺跡と慶田崎遺跡他に居住していたことが考えられる。いずれにしても当時1つの集落の人口は20~30名程度のものであったことが推定できる。このことは他の離島に存在する当時の遺跡の人口を考える意味でも大いに参考になる資料と見られる。

しかしながら、今回の調査で感じたことは、14~16世紀代の遺跡にしては、石垣島や宮古島などの遺跡と比べると、与那国島の遺跡は小規模で遺物の分布量がきわめて少ないことがわかった。そのことからすると先述の当時の人口推定は石垣島や宮古島にはあてはまらない。

今後も遺跡は発見される可能性があり、現在の考えは多少の訂正が必要となることが考えれる。

遺跡の立地で考えてみると、島仲遺跡や与那原遺跡のように14世紀代の遺跡は台地上に立地するが15世紀代になると浦野遺跡などのように平地に移動してくる傾向がみられる。14世紀代までは、防御的性格の集落であったことが考えられる。防御の対象はこのような島国の場合は島内に対するよりも島外の侵入者に対してが考えられる。

『大きな草履を作って海に流した』などの伝承はこのことの裏付けになる。

近年与那国島の遺跡は開発事業に伴ってではあるが、トゥグル浜遺跡、慶田崎遺跡、与那原遺跡の三遺跡で発掘調査が行われ成果をあげている。

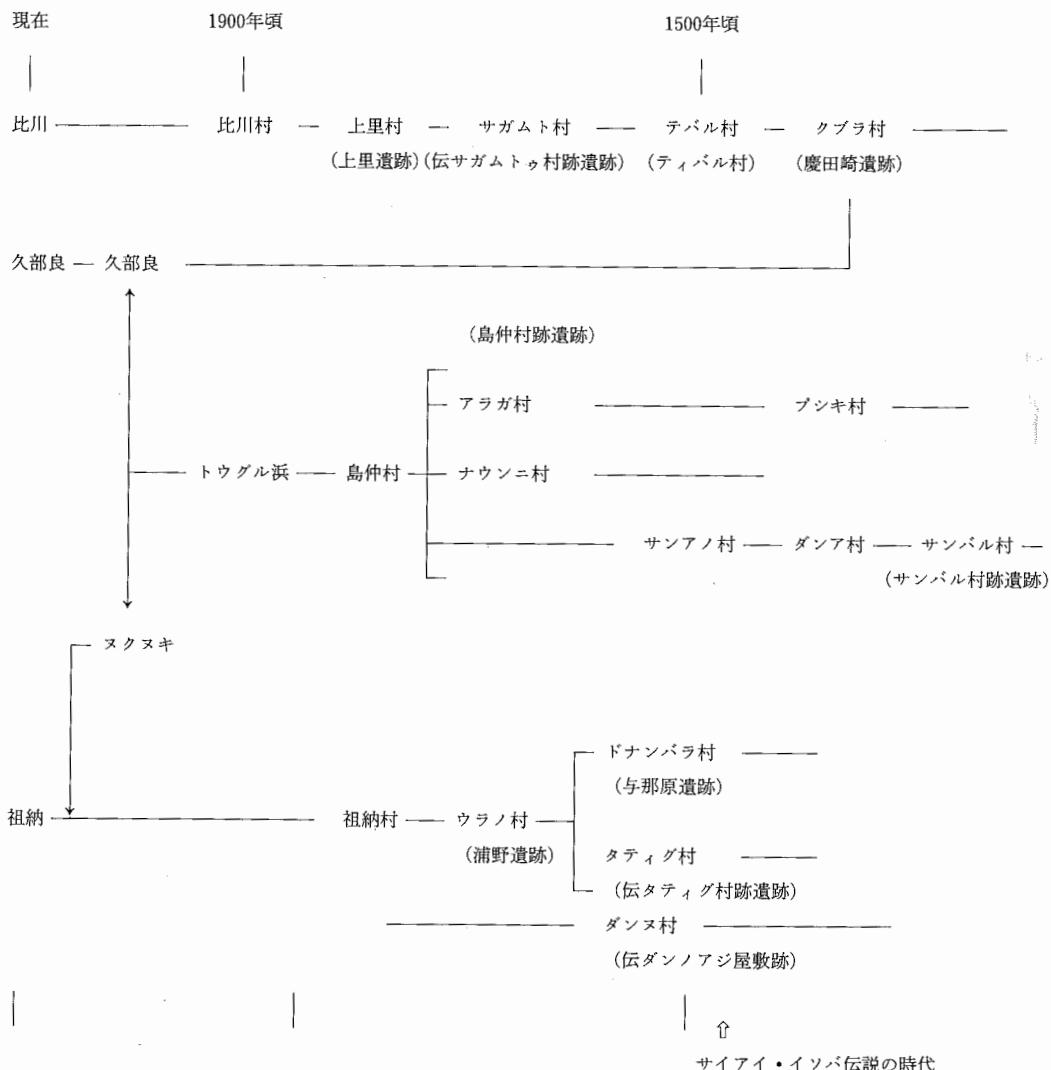
特に与那原遺跡では、住居跡を初め倉庫跡、鍛冶屋跡などの遺構がセットで検出されている。

最後に与那国島の集落移動について金城

亀信と江藤和幸の行った考察があるので参考までに掲載する。文献では久部良には大正以後に集落は形成されているので、慶田崎遺跡が移動してからかなり経過して集落が形成されたのかまたは、比川部落の一部であった可能性もあるが伝承でみると前者の可能性が強い。

各遺跡の編年表を最後にかかげた。

#### 与那国島の伝説による旧村落地名（江藤・金城作成）



サイアイ・イソバ伝説の時代

### 与那国遺跡の編年表

文 献

- 注 1 笹森義助 「琉球群島における人類学上の事實」 東京人類学雑誌 第10卷 第113号・114号 1895年

注 2 多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念補遺」文化財要覧1960年度版 琉球政府文化財保護委員会

注 3 永井昌文「与那国島大和墓由来の頭骨について」八重山群島學術調査報告2号 九州大学外學術調査委員会 1964年

注 4 「國頭比地部落・与那国島調査報告」

『郷土第10号』沖縄大学学生文化協

会 1971年12月

- 注 5 「竹富町・与那国町の遺跡」－詳細  
遺跡分布調査報告書－沖縄県教育委  
員会 1980年3月

注 6 「与那原遺跡」－個人農家の土地改  
良等に伴う緊急発掘調査報告－

注 7 注 6 に同じ

注 8 注 3 に同じ

注 9 注 1 に同じ

注10 『李朝実録』(成宗実録) 1392～  
1910年